



瀬戸内海歴史民俗資料館

新しいテーマ展がはじまります。

平成31年3月6日(水曜日)

瀬戸内海歴史民俗資料館

(香川県立ミュージアム分館)

担当 木内 英博 TEL 087-881-4707

テーマ展

「情熱をもち瀬戸内文化を探り、考え記録した人
—高橋克夫展—」がはじまります。

1 会 期 平成31年3月21日(木・祝)～5月26日(日)

開館時間 午前9時～午後5時(入館は午後4時30分まで)

休 館 日 毎週月曜日(月曜日が休日の場合は翌火曜日、但し4月30日(火)は開館)

2 会 場

瀬戸内海歴史民俗資料館 第9・10展示室 (高松市亀水町1412-2 五色台山上)



高橋克夫と歴民

3 趣旨・内容

当館は全国でも数少ない広域資料館として、瀬戸内地方の歴史、民俗、考古に関する資料の収集や展示、調査・研究を行うために整備されました。高橋克夫(1918～2000)は、当館専門職員として設立準備から、開館、草創期の館事業に多大な功績を残しました。広域資料館・海の資料館として、当館の存在意義を模索し、また将来のあるべき姿を見据えた活動をしました。そのなかでも顕著な業績は、当館国重要有形民俗文化財「瀬戸内海及び周辺地域の漁撈用具」2,843点の収集・整理に尽力したことです。

本展示では、高橋克夫が当館職員として、情熱あふれる行動力で瀬戸内海地域を駆けめぐり、収集した資料(漁撈用具)を展示するとともに、長い年月をかけて収集した図書や、資料収集時の聞き取り調査メモ、各地域で記録した写真などを紹介します。また、高橋克夫がその生涯をかけてテーマとした「瀬戸内から、海洋民族文化の根源を探り当てるための手がかりを探る活動」の一端を紹介する展示でもあります。

4 展示構成

第1章 小豆島で過ごした少年時代から英語科教員へ

高橋克夫は、小豆島の旧内海町安田村(現小豆島町)で、神懸山保勝会会長などを務めた高橋和三郎氏の四男として生まれました。小豆島で幼少期を過ごした高橋克夫は次第に大陸へのあこがれを抱き、戦前中国にあった上海東亜同文書院に学びの地を求めます。その後、南洋で従軍した後復員し、昭和26(1951)年、香川県の県立学校の英語科教諭として津田高等学校へ赴任し、20年間の教員生活を送ります。第1章では、高橋克夫が収集した図書や、教員時代の活動を示す資料などから、故郷である小豆島への思いや、次世代の人間育成に尽力した「教師高橋克夫」の一面を紹介します。

第2章 歴民専門職員として

昭和46(1971)年、50歳で、教員から香川県教育委員会事務局社会教育課社会教育主事となり、当館の設立に関わるようになった高橋克夫は、開館から草創期の職員として、昭和55(1980)年まで活動します。その間、高橋克夫は、国重要有形民俗文化財「瀬戸内海及び周辺地域の漁撈用具」2,843点など、多くの漁撈用具を瀬戸内海各地から収集しました。広域資料館として当館が根底にもつべき意味を模索しながら、計り知れない情熱と行動力で東奔西走した活動の様子を、高橋克夫が収集した資料や、当時のメモ、写真などの記録資料から探求します。

・高橋克夫が収集した瀬戸内最後のテグス行商船 [写真1] と船内で使われた水ガメ [写真2]

瀬戸内海の一本釣り漁師にとって欠かせない釣糸用のテグスは、専門のテグス船によって行商されました。テグスや釣糸など釣具一式を積み込み、船上生活を続けながら瀬戸内一円の漁村を回っていた鳴門市堂浦のテグス船は、知らぬ者がいないほど親しまれていました。高橋克夫は、このテグス行商船の実物資料を収集したことがきっかけとなり、テグスや行商の由来、意義などに興味をもつようになったと述べています。

[写真1]



最後のテグス行商船（徳島県鳴門市、高橋克夫撮影）

[写真2]



水ガメ（国重要有形民俗文化財、当館蔵）

第3章 民俗と民族の探求

高橋克夫は、記録として文字に残らない庶民の日常生活のなかに「民俗の心」を感じるとともに、瀬戸内の多くの民俗事象が、香川県域はもちろん、瀬戸内海地域だけでは究明できない問題を含んでおり、それらを解決するためには、より広いグローバルな視点が必要であるとの認識をもち、その研究対象を海外にも求めていきます。海洋民族文化の根源を探りあてるため、香川から瀬戸内へ、瀬戸内から世界へと情熱あふれる行動力で、調査研究の歩みを広げていく高橋克夫の驚異的な活動を、海外から収集した資料や記録写真などで紹介します。

・世界的視野で瀬戸内の民俗事象をとらえた資料 [写真3]

瀬戸内の漁撈用具を瀬戸内のなかだけでとらえても、その特色や意味を分析するには不十分であると考えた高橋克夫は、アメリカや北欧を訪れ、資料を収集します。1番上のアミバリは、アメリカ・メイン州の漁師から収集したもので、材質はカシです。当地では、「knitting needle」とよばれ、刺網またはロブスター・トラップ（エビカゴ）の餌袋を編むときに用いられました。2番目は、孟宗竹製で、大正末頃まで、高松市において、サワラ瀬曳網を編むときや、その補修に用いられました。3番目は、昭和52（1977）年に、ノルウェーのトロンハイムという町で収集した、プラスチック製のアミバリです。一番下のアミバリは、マダケ製。昭和の初めに、丸亀市本島で、テグリ網や打瀬網用に使われたものです。

4点とも、材質以外はその形、用法ともにはほぼ同じです。高橋克夫はこれらの資料を比較し、「どこかに原型があり、それが世界に伝播したものか。それとも、人間の考えつくことは、どこも同じなのか。素朴な疑問がわくとともに興味深い」と述べています。

[写真3]

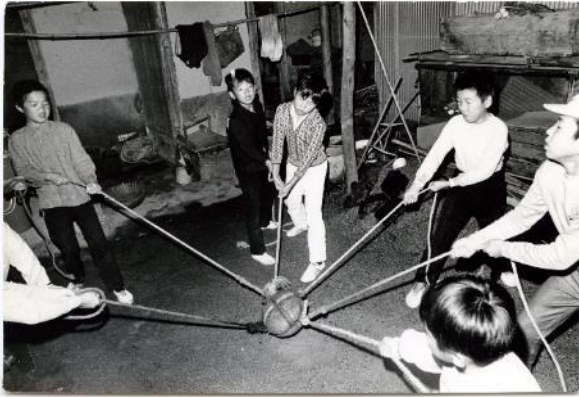


高橋克夫が瀬戸内だけでなく、世界各地から収集したアミバリ

（上から2、4番目は国重要有形民俗文化財、当館蔵）

第4章 民俗写真家としての顔

高橋克夫は、讃岐写真作家の会の会員であり、昭和42（1967）年に始まった第1回香川県写真展で入賞を果たし、さらに昭和46（1971）年には二科展でミランダ賞を受賞するなど高い写真技術と感性をもっていました。武田明とともに民俗事象を精査し、その一端を写真とともに紹介した『備讃瀬戸の民俗と風土』（木耳社、1973）は、高橋克夫の写真技術が生かされた貴重な民俗書であるといえます。また高橋克夫は、日本民具学会誌の基礎講座「民具の撮影—その技術と心得—」において11回にわたり連載を行いました。祭りやものづくりの現場を撮影した写真には、高橋克夫がとらえた「民俗の心」を感じとることができます。その写真の一部を展示します。



箱地区の亥の子（三豊市、高橋克夫撮影）



素麺の箸分け（小豆島町、高橋克夫撮影）

5 展示資料点数 150 点（うち国重要有形民俗文化財 14 点 [瀬戸内海歴史民俗資料館蔵]、写真資料を含む）

6 観覧料 無料

7 展示解説会

本展示期間中、次の日時に、当展示に関する展示解説会を予定しています。

1 回目 3 月 23 日（土） 午前 11:00～

2 回目 4 月 20 日（土） 午前 11:00～

3 回目 5 月 18 日（土） 午前 11:00～

8 れきみん講座

本展示期間に合わせて、次の日時に当展示に関連するれきみん講座を予定しています。

5 月 12 日（日） 午後 13:30～ 場所：瀬戸内海歴史民俗資料館 研修室

春は桜、初夏は新緑。当館テーマ展を鑑賞していただきながら、イロトリドリの色紙で、心のリフレッシュを！！